

歴史は未来の羅針盤

温故知新

今回は、近江日野商人館からお届けします。商人館では、企画展「日野商人のハイカラ道具展」を開催中です(十月末まで)。幕末から戦前までのハイカラ道具の数々を展示し、堅実に生きた日野商人が反面で持ち合わせていた、進取性に富む斬新な生活ぶりを紹介しています。

※心学を学び、広め、実践した日野商人

今年の広報六月号で、「日野商人の商業道徳」について記しましたが、もう少し詳しく見てみましょう。

日野商人の組合「日野大当番仲間」では、江戸時代の終わり頃に、商業道徳として心学を重視し、組合員個々に奨励していました。

その背景には、全国に広まりつつある心学の商業道徳を身につけた商人でなければ、もはや世間に通用しないという時代背景がありました。

すでに十九世紀の初め頃から、時代の先読みに敏感な日野商人のなかには、みずから進んで心学を学ぶ人も多くいました。

例えば、中在寺村の四代目矢尾喜兵衛は、『心学見聞草』、『道中独問答草子』などの覚え書きを残すほど心学に心酔し、「商家の主人が心学を知らなければ、家の繁栄は

危うく、強欲な商人になってしまふであろう」と、子孫に言い残しています。

息子の五代目喜兵衛も感化され、「先代がまとめた心学の書物は、毎日、読むべきである」と、遺言しています。

内池町の商人門坂善太郎も熱心に心学を学んだ一人です。京都の有名な心学者脇坂義堂に入門しており、師匠の薦めで日野の善治青年の親孝行ぶりを描いた『江州日野孝子善治行状』という道徳本を京都で出版することも行っています。この本は、寺小屋や家庭用の徳育教科書として多くの人に読まれました。

この脇坂義堂は心学の精神を行動に移し、数々の陰徳善事(社会貢献事業)を行っていますが、その協力者の一人が日野商人の中井源左衛門(岡本町)でした。

脇坂の協力要請に応じて、文化二(一八〇五)年に、京都・大津間で困難を極めていた荷物輸送を楽

なものにするため、石にわだちを刻んだ牛車道を敷設し、日本で最初の道路舗装を完成させました。

初代源左衛門は、子孫に伝え残した「金持商人一枚起請文」に記しているように、始末・節約の精神を強調する一方で、陰徳善事の大切さをも力説しており、社会貢献事業を積極的に実践し、生涯にわたって、多方面で惜しみなく多額の寄付を行っています。

なお、この起請文は、脇坂の著書『五用心慎事』にも記されており、心学実践の同士としての両者の親密さがうかがえます。

このような陰徳善事の実践は、中井家だけでなく、他の日野商人においても重要視されていました。例えば、山中兵右衛門家(仕出町)の家憲「慎み十か条」では、最初の一か条に

一、「役職を利用し、私生活では威張らない」という慎みを日常の心がけとせよ。
なお、陰徳を大切にしてい

世に役立つことを行え。と、慎みのある生活の中での陰徳行為の大切さを特筆しています。内池町の日野商人外池清兵衛は、文久三(一八六三)年に、心学の教科書『道歌百人一首』を人々のために出版しています。

「働けば 宝のできる手を持ちて 遊んでいるは をろかなりけり」

このような教訓的な心学の歌(道歌)を百首集めたものです。

慶応三(一八六七)年には彦根でも出版され、庶民の道徳・倫理感を育成する役割を果たしました。

このように、多くの日野商人の心には、心学が深く浸透していたのです。



▲湖東地方で広く読まれた『道歌百人一首』

※心学…江戸時代の終わり頃に流行した道徳の一種。